

第九章 胡椒交易争奪戦とマラッカ海峡

第九章 胡椒交易争奪戦とマラッカ海峡

第一節 Pajang-Mataram サルタン国

〈263〉Demak サルタン国は 1546 年に滅亡したと決めることができる。第三者としての Jaka Tingkir 別名 Adiwijaya の尻馬に乗せられたので、Demak を破壊した Arya Penangsang Jipang はサルタン国の王位に就くことはなかった。実際にはこの第三者こそが勝利と権力を獲得することになった。Sunan Prawata と Arya Penangsang Jipang の両者は戦死した。

Babad Tanah Jawi の中に見られる Sunan Prawata の没年は 1453 年で Arya Penangsang Jipang の没年が 1471 年という年号は信用できない。スマランの三保洞廟の中国語年代記に記載された年号の方がより信用できると思われる。この年代記中の年号は他の史料にある年号と合致することが証明された。それ故、Sunan Prawata と Arya Penangsang Jipang の死亡について 1546 年という年号が Sultan Adiwijaya に率いられた Pajang サルタン国の建国を確定するための手がかりとなるのである。

Babad Tanah Jawi に、Arya Penangsang Jipang との戦いで Adiwijaya は Ki Ageng Pemanahan, Ki Ageng Panjawi, Sutawojaya 別名 Ngabei Loring Pasar と Ki Juru Martani の支援を受けたという話がある。〈264〉この四人が Arya Penangsang Jipang を亡き者にしたのであった。彼らは Adiwijaya の協力者として行動したのではあるが。Ngabei Loring Pasar は Adiwijaya に養子にもらわれて長男として育てられた Ki Ageng Pemanahan の息子であった。その当時 Adiwijaya にはまだ子供がいなかった。

Adiwijaya は、Arya Penangsang Jipang を亡き者にしたものは草刈り人夫でも誰でも、Pati と Mataram の土地を下賜すると発表した。Ki Ageng Pemanahan, Ki Ageng Panjawi, Ki Juru Martani, Ngabei Loring Pasar は Adiwijaya のこの懸賞の実行を引き受けた。最終的に彼ら四人がこの懸賞を獲得した。Pati 地方は Ki Ageng Pemanahan の合意の基に Ki Ageng Panjawi が得た。その後、Ki Ageng Panjawi は Nyai Ageng Pati の呼び名で知られるようになる。

Ki Ageng Pemanahan, Ki Juru Martani, Ngabei Loring Pasar は背の低い雑木で覆われた森がまだたくさんあった Mataram の土地を得た。彼ら三人は土地を整理するために Mataram に直ちに出発した。Ki Ageng Mataram は Kota Gede に居住し、Mataram の偉い人として知られた。Ki Juru Martani は Ngabei Loring Pasar 別名 Sutawijaya の指導者として働いた。Ki Ageng Mataram は Pajang の属国の人であると認識していた。かれには Pajang のサルタンの支配から抜け出て独立するという夢は全くなかったのである。Mataram の偉人 Ki Ageng Pemanahan は 1575 年に亡くなった。Ki Ageng Pemanahan の死に伴い、この状況が変化したのであった。

Ki Juru Martani は彼の父の死を報告するために Ngabei Loring Pasar を誘って、Pajang のサルタンに謁見した。Sultan Adiwijaya はその報告を受領した。Ngabei Loring Pasar は父親の代わりに Kota Gede に居住する Mataram の偉人になるようサルタンから指示された。Ki Juru Martani はそのまま Ngabei Loring Pasar を見守った。Sultan Adiwijaya は Ngabei Loring Pasar に毎年 Pajang に挨拶に来ることを忘れないようにと念を押した。〈265〉

Pajang から戻った後、Ngabei Loring Pasar は Mataram に要塞を作る意図を持っていたので、人々に煉瓦を作るように指示した。要塞建設の忙しさにまぎれて毎年 Pajang のサルタンに会いに行くことを忘れてしまった。Ngabei Loring Pasar は、まだ Sultan Adiwijaya を怖がっていたにもかかわらず、本心では Pajang のサルタンの下にいることを好んでいなかった。Sultan Adiwijaya は養父でありまた帝王道の先生でもあった以外に Ngabei Loring Pasar に対する態度には非の打ちどころがなかったため、Ngabei Loring Pasar は大層な借りがあると感じていた。Ki Ageng Pemanahan の Mataram の偉人への注文を誠実に行おうとした Ki Juru Martani は Ngabei Loring Pasar に Pajang での謁見の義務を果たさなければならないことを確認した。しかしながらこの確認は果たされなかった。Kedu¹や Bagelen²の人たちが Mataram³を通過して Pajang に貢物を届けることをやめるようにと Mataram の人たちに Ngabei Loring Pasar は命令した。この人たちは Kota Gede で投宿するように勧められた。Kota Gede に着くとかれらは Ngabei Loring Pasar 自身に迎え入れられぜいたくな宴会に誘われたの

¹ (訳) Temanggung 地域

² (訳) Yogyakarta 西側の Purworejo 地域

³ (訳) Kota Gede 地域

だった。このようなやりかたで彼は Kedu と Bagelen 地方の首長たちの同情を得たのであった。彼らの一部は Ngabei Loring Pasar に仕える方を好んだので、Pajang に謁見に行くことを止めた者もいた。

この Ngabei Loring Pasar の行動は Sultan Adiwijaya を立腹させた。Ki Wilamarta と Wuragil は、Ngabei Loring Pasar が飲食と髪の手入れを止める命令を持って Ngabei Loring Pasar を呼び出すための使者にたった。その答えは人を怒らせるものであり Ngabei Loring Pasar の性格がいかに残酷で無礼なものであったかを指し示している。「私はまだ飲み食いしたいのだ、と Pajang のサルタンに伝えよ。髪の手入れに関する命令については髪は自分で生えてくる。サルタンへの謁見に関しては、後で会いに行くと言ってくれ」と。〈266〉

とても注意を引く記事は、Ngabei Loring Pasar は天の啓示を得るために Opak 河口でインド洋側の海岸で苦行を行ったことである。。この苦行中に彼は Nayi Rara Kidul⁴に出会った。Nayi Rara Kidul との結婚は叶わなかった。しかし Ngabei Loring Pasar が必要とするときには毎回援助すると Nyai Roro Kidul は約束した。彼が黙禱して Nyai Rara Kidul を呼ぶと、必要とする援助が毎回直ちにやってきた。Mataram のサルタンと Nyai Rara Kidul の結婚はジョグジャカルタとスラカルタのジャワ社会で深く信じられている物語を形成したのであった。インド洋海岸で苦行する習慣はまだ今になっても多く行われている。この寂しい場所での苦行の習慣は事実上ジャワ・ヒンドゥーの時代の修行者によって行われていたものの続きであることに他ならない。Ngabei Loring Pasar は上記の習慣にまだ従っていた。Ki Juru Martani は Merapi 山の麓で苦行を行っていた。寂しい場所で懸命の努力を行っていた以外に、Ngabei Loring Pasar は実際上、建国途上にある Mataram サルタン国の港としてこのインド洋側の海岸が港湾に適しているかどうかを調べた。いずれにせよ、ジャワ海側の海岸はいまだ元 Demak サルタン国の華人たちの支配下にあった。Ngabei Loring Pasar は南海岸に港を作って Jin Bun 王朝時代の Demak のような大航海時代の国家の建設を熱望していたのであった。しかし実際には波が高すぎたのであった。南海岸での港湾建設の可能性はなかった。インド洋の支配者の Nayi Rara Kidul と Mataram のサルタンとの結婚は行えなかった。建国途上にあった Mataram サルタン国は港湾を持つことが

⁴ (訳) Nyai Roro Kidul と呼ばれる。南海冥府の女王の意味

できず、大航海時代の国家になれなかった。Nayi Rara Kidul との結婚は空想を作り上げただけであった。Mataram サルタン国は永遠に農業国でありその都は内陸部に置かれた。これが、Babad Tanah Jawi で説明しているような Ngabei Loring Pasar と Nyai Rara Kidul との結婚の意図に関する物語の解釈であろうと思われる。〈267〉

Mataram に新しいサルタン国を建国するための Ngabei Loring Pasar はその意思を固めた。臆病にも Pajang の支配に反旗を翻すつもりは全くなかったが、彼は Pajang の下の人になることは好まなかった。この出来事は彼が謀反人としてやったことと理解された。このような背景から Pajang のサルタンは Banawa という名の息子を Mataram に本当の目的を隠して派遣した。Pajang で謁見させるために Banawa は Ngabei Loring Pasar をおだてあげなければならなかった。その誘いを断った場合に Mataram は攻撃されることになっていた。それ故、Banawa 王子は Tuban 太守に率いられた軍と共に出発した。Banawa 王子のこの訪問は Ngabei Loring Pasar に嗅ぎつけられていた。Mataram に到着すると大々的に出迎えられた。Pajang の人たちはぜいたくな宴会で接待された。Banawa 王子の誘いは、Ngabei Loring Pasar が Pajang のサルタンに謁見することを気持ちよく引き受けてくれるようにすることであった。このぜいたくな宴会中に Tuban の軍隊は楯の踊りと武器を使った踊りを上演し、Ngabei Loring Pasar の息子の Rangga 王子と一緒に踊らされた。Rangga 王子はクリスで刺されたが全く傷つかなかった。Rangga 王子は不死身であった。最後に Tuban の人がびんたを食らって頭が割れた。ぜいたくな宴会は解散した。上記の事件は Pajang のサルタンに対する非難として理解されるので、Pajang の人はサルタン Adiwijaya に報告するために帰国した。

Pajang と Mataram との関係はずっと緊張し続けていて、戦争の口実になりうるいくつかの事件が起きたのではあるが、Sultan Adiwijaya が亡くなるまでは戦争にならなかった。Mayang 太守の息子 Pabelan 王子が Sekar Kedaton の女性に下品な行為を行ったかどで Pajang のサルタンに死刑にされた。息子の教育の不行き届きという理由で Mayang 太守も過ちを犯したとされ、その地位をはく奪され 80 名の武装した兵隊に護られてスマランに流刑になった。Ngabei Loring Pasar は Mayang 太守の義理の兄弟であった。彼がこの話を聞いた時、道の真ん中で警備して Pajang 軍の警備から Mayang 太守を助け出すために Mataram の人を動かした。〈268〉

1582年に Sultan Adiwijaya は Mataram を攻撃する計画をしていた。この計画は中止された。Mataram への途中で Sultan Adiwijaya は病気になった。Pajang の軍隊は Prambanan で停止し Pajang に戻るように命令された。その帰路に Pajang 軍は Ngabei Loring Pasar 自らが率いる Mataram 軍の騎馬隊に跡をつけられた。Pajang に着くと、Ngabei Loring は義理の兄弟が住む Mayang 村に投宿した。その時 Sultan Adiwijaya が亡くなった。その死後、サルタン国の継承権に関して圧力が発生した。Banawa 王子は側室の子ではあったが長男であった。正室の Trenggana のサルタンの娘と Sultan Adiwijaya との間には後日 Demak の adipati と結婚することになる娘がいた。Sunan Kudus の勧めで Demak の adipati は妻の名前で Pajang サルタン国の王位を継承した。Banawa 王子は Jipang の adipati になった。養子の Ngabei Loring Pasar はそのまま Mataram にいたのであった。

Banawa 王子は公平に取り扱われていないと感じた。それ故、その後にその権利をすべて Ngabei Loring Pasar に移譲するという約束を持って Ngabei Loring Pasar の支援を頼んだ。この二人が Demak の adipati を退けることに成功したら Pajang サルタン国の継承権は Banawa から Ngabei Loring Pasar に譲られることになる。Adipati Demak



KANJENG PANEMBAHAN
SENOPATI MATARAM

は妖精に縛られてしまった。そして Demak へ送り返された。しかしながら、Ngabei Loring Pasar は Mataram に既に王宮があったので Pajang には投宿しなかった。Pajang の王宮は放置されたままであった。Ngabei Loring Pasar は 1586 年に Senapati Ing Alaga Saidin Panatagama という名で Mataram のサルタンに即位した。その後 Ngabei Loring Pasar は Panembahan Senapati という名で知られるようになった。Mataram サルタン国の勃興に伴い Pajang は衰退したのであった。

Panembahan Senapati は東方に支配地域を拡大した。最初の目標になったのは、スラバヤであり、スラバヤ太守の(H)Adiwijaya (Hadiwijaya = Pajang)は最も強力で多数の配下を持っていた。〈269〉Senapati は Blora 経由して東に軍をすすめ Japan⁵で停

⁵ (訳) 原文では Japan。正しくは Jipang。Japan という地名は Pekalongan の南にある。

止した⁶。スラバヤの王子は Tuban, Sedayu, Lamongan, Gresik, Lumajang, Kertasana, Malang, Pasuruan, Kediri, Blitar, Priggabaya, Lasem, Madura, Sumenap, Pakacangan, Praganan の太守を Panembahan Senapati と対戦する準備のために集合させた。スラバヤの王子は降伏させられた。その後 Senapati は軍を Madiun に進めた。Madiun 太守の軍は Mataram の軍よりはるかに多かった。Senapati は降伏を装った謀略を建て、降伏状を持たせた女の使者を Madiun に派遣した。その手紙が届いた後、Madiun の属国の太守たちは会議を開いたところ、各々の軍勢を引き連れて戻り、戦線を解除するという意見が多数であった。Madiun は孤立した。その時 Mataram の軍は Madiun の町を攻撃する命令を受けて出撃した。この突然の攻撃で adipati Madiun は町を後にして逃げ出した。Pasuruan, Kediri, Panaraga も Mataram に降伏した。東側では Blambangan, Panarukan, Bali がまだ独立を保っていた。その他は Senapati の支配に屈した。西側の Dedu, Bagelen, Banyumas, Cirebon 南部、一方ジャワ海北岸の Rembang, Pati, Demak, Pekalongan は Mataram の支配を認めた。このように、Mataram サルタン国は Panembahan Senapati の勇気のおかげで拡大した。しかしながら Mataram サルタン国は農業国であり続け、大航海時代の国家になりえなかった。死ぬまで Panembahan Senapati はジャワ島の内陸部に支配地域を拡大しようとした。1601 年に Panembahan Senapati は死去したが、Mataram サルタン国は既に強力になっていた。同時に内陸部にその範囲を拡大しようとしていた新 Mataram サルタン国から少しも妨害を受けずに Maluku での香料交易はポルトガル人に支配されていたのであった。〈270〉



Jan Huygen van Linschoten

第二節 オランダ人のインドネシアへの来航

約百年間にわたりポルトガル人たちは喜望峰を経由した東方の国々への航路を秘密にすることができた。16 世紀の末まで、ポルトガル人以外にはこの航路を知っているヨーロッパ人はいなかった。1595 年に喜望峰を経由する東方諸国への航路の秘密がオランダ人のヤン・ホイフェン・ファン・リンスホーテン

⁶ (訳) Blora は Jipang より東にあるのでこの記載は誤りのようだ。

(Jan Huygen van Linschoten)の著書 Itinerario によって暴露された。出版物 Itinerario はインド洋での航海と東方諸国でのポルトガル人の交易について解説している。ヤン・ホイフェン・ヴァン・リンスホーテンがゴアの牧師の助手をしていた時にかれはインド洋での航海の説明を得たのであった。Itinerario の出版のおかげで、東方交易は喜望峰経由になった。

1548 年にオランダはスペインの支配から独立した。それ以来、オランダとスペインとの間の軋轢が生じた。この軋轢は 80 年間も継続し、オランダ史では「八十年戦争」と呼ばれている。めらめらとした闘争心と燃え盛る国家精神で、オランダ人たちは自分の国を建国しようとしていた。オランダ船がまだリスボン港に入港できた間は、これらの船舶は、ヨーロッパで取引できる東方諸国の産品を運ぶことができた。この交易から彼らは十分な儲けを出すことができた。しかし 1580 年以降、リスボン港はスペインの支配下に入った。スペイン人にとってオランダ人は不信心ものであった⁷。それ故、リスボンに投錨しているオランダ船が略奪にあった。これに続いて、オランダの商船はリスボン港には入港禁止となった。ヨーロッパ大陸で極めて需要が高く高価な香料やその他の商品を産出する東方諸国への航路をオランダ人は探していた。このように、ヴァン・リンスホーテンの著書 Itinerario の中の解説はオランダ商人にとって極めて価値のあるものであった。〈271〉



Frederik de Houtman

東方諸国への航路は完全にポルトガル人に支配されていた。ポルトガル船が通る航路を進むことができる他の船はなかった。停泊する諸港も厳しく警護されていた。ポルトガル人による海上警備も極めて厳格に行われていた。あえて航行しようとする他国の商船は強奪に遭った。しかしながら、オランダ商人たちは、東方諸国に向かうのに喜望峰を経由する航路を強く望んでいた。彼らは 1,290,000 オランダフローリン⁸を集め、途中での盗賊に敵対するための大砲やその他の火器で船を装備した。東方に向かうオランダ

⁷ (訳) 新教と旧教の抗争による。

⁸ (訳) ギルダーに同じ。

の艦隊はコルネリスとフレデリック・デ・ハウトマン(Frederik de Houtman)の兄弟に指揮させることが決定された。

オランダ艦隊は1595年4月2日にTessel⁹を出港しフランス、ポルトガル、西アフリカ沿岸を通過してマダガスカル(Malagasi)に至った。マダガスカルからこのオランダ船はMalabar海岸¹⁰を目指し、沿岸沿いにカリカットまで進み、その後スリランカに向かった。スマトラの東海岸で停泊するのは極めて危険であり、Aceh港にはムスリム以外の外国船は停泊を禁止する旨のAcehのサルタンの決定があったと聞いていたのでデ・ハウトマンはJohorまで直接航海し、Johorからジャワの海岸を目指した。



ハウトマンはJohorまで直接航海し、Johorからジャワの海岸を目指した。

15か月の航海の後に、このオランダ船団はBantenの港に着いた。コルネリス・デ・ハウトマンは上陸しMangkubumiと対面した。オランダ人たちは商品を保管しておくための家を借りる許可を得た。Banten滞在中、オランダ船員が村に出入りしていた。この件はこの船員たちが現地の習慣を知らないという印象を与えた。デ・ハウトマンと彼の友人たちは捕虜になり刑務所に入れられた。船に残っていたオランダ人たちは船長が捕まって捕虜になったと聞いて発砲した。〈272〉しかし、この砲撃は全く無視された。

デ・ハウトマンは身代金を払って釈放されたのだった。

胡椒を満載した二隻を強奪した後、Jayakartaではオランダ人たちが熱望していた香料は入手できなかったが、オランダ船団はJayakarta港に向けて出港した。その後彼はSedayuを目指して航海を続けた。Sedayuでは突然オランダ船に入ってきたSedayu人たちがオランダ船員を暴行した。この暴行事件で何人かのオランダ側に何人かの犠牲者が出た。オランダ側がその後砲撃をしたのでSedayu側にも犠牲者が出たが、このおかげでSedayu人たちを追い払うことができた。続いてこのオランダ船

⁹ (訳) Amsterdamの港

¹⁰ (訳) インド西海岸のKochi

団は Arisbaja, Bawean¹¹, Blambangan に投錨し、その後ジャワ島南岸沿いを通してオランダに向かった。

最初の航海は 28 か月を要した。乗組員 248 名の内でオランダに帰還できたのは 89 名であった。159 名は航海途中で死んだ。最初の航海では香料諸島に至ることができなかった。船団は夢に描いたような商品を持たずに帰港した。物質的な計算ではこの航海は損失をもたらした。お金で評価できない利益とはオランダ人たちが東方諸国への航路を明確に知ることができたことであった。この知識のおかげで最初の航海での損失は後日何倍にもなって戻ってきたのであった。



Jacob Corneliszoon van Neck

二回目の遠征は 1597 年 5 月 1 日にヤコブ・ファン・ネック¹²に率いられてオランダを出港した。船団は 8 隻から構成されていた。Banten の人たちはその時ポルトガル人と抗争中であったために Banten 港でオランダ船団は歓迎された。Banten 港での四隻分の交易品はオランダ商人たちが一括購入した。〈273〉四隻は商品を満載してオランダに帰港し、一方残りの四隻は Maluku を目指して東に航海した。Maluku へのオランダ船の来航は現地の人たちに大歓迎された。ヤコブ・ファン・ネックは Ternate のサルタンと Amboina、Banda の人たちとの間で通商条約を締結することに成功した。Maluku を訪れた四隻のオランダ船は香料を満載してオランダに帰港した。この船団は 1599 年 6 月 19 日にオランダに到着した。二回目の航海は輝かしい成果を生んだのだった。

これと並行して三回目の遠征の準備が進められていた。1598 年 3 月 25 日に De Leeuw(雄虎)号と De Leewin(雌虎)号の二隻は第一回目の航海を指揮したコルネリス・デ・ハウトマン司令官の指揮下でインドネシアに向かった。Leeuw 号と De Leewin 号は 1599 年 7 月 1 日に Aceh の港に停泊した。すなわち、オランダから Aceh までの三回目の航海は 3 か月と 6 日を要しただけであった。デ・ハウトマンは 225 人の部下

¹¹ (訳) Madura 北方 150km にある島

¹² (訳) Jacob Corneliszoon van Neck

を擁していた。Aceh 港に着くとデ・ハウトマンと部下たちは直ちに港湾長に到着の旨を報告し、その後サルタン Alauddin Riayat Syah の宮廷に案内された。彼らはそこで親密な態度で歓待された。乗組員全員が宴会でもてなされた。サルタン Alauddin Syah は水牛を屠殺するように命じた。商売の許可とともにテントと事務所のための一筆の土地を Aceh のサルタンから与えられた。一週間でデ・ハウトマンは船に積み込む胡椒を一括で買うことができた。当初このことは本当に疑惑がなかった。



1599年7月30日にサルタン Alaudding Riayat Syah はオランダ船と胡椒の貸借契約にサインした。賃借料の半分は出港前、残りの半分は船が戻ってきてからの支払い条件であった。このオランダ船は Aceh 軍を装備と共に輸送するために使われることになっていた。この事件はポルトガル側を喜ばせるわけはなかった。その時、Aceh の宮殿にも Affonso Vicente というポルトガル語の通訳がいた。このオランダ人への接待行為のすべては Affonso に知られていた。〈274〉Affonso がサルタンにオランダ側との通商条約を破棄するように勧めたが、サルタンは自分の意見を通した。しかし、Affonso は Aceh の人たちを挑発してデ・ハウトマンの部下たちのオランダ人と敵対するようにさせた。すべての知恵がオランダ人たちに対する常識に影響するように利用された。

オランダ船は 1599 年 9 月 11 に Aceh 港を後にすることが決定された。この出発を祝うために乗員全員に出発前に陸上から食事を提供するようにサルタンが命令した。この命令は港湾長とサルタンの部下たちによって実行された。しかし、オランダの運命は不幸の真ん中であつた。乗組員が陸からの食事を食べた後、その中には嘔吐したものが多かった。彼らは毒を盛られたのではなかったかという疑問が湧いた。オランダ側は、彼らが意図的に毒殺されたと訴えた。その結果、Aceh とオランダ側の間で撃ちあいが始まった。事務所にいたオランダ人は包囲され、道路上にいたオランダ人は暴行された。オランダ船の乗組員の 95 人が犠牲になった。船にいたデ・ハウトマンは銃弾に当たって負傷した。

この撃ちあい事件は直ちにすべての関係者に伝わり、Aceh の人々を激怒させた。この食中毒事件に関して詳細調査が行われた。陸から運ばれた食べ物が疑われた。これを喜ばない方のグループの破壊行為であった。Affonso Vicente は通訳の職を追われた。すべての誤解を防ぐために、オランダ人たちを一カ所に集めるようにサルタンが指示した。すでに乗船している者は下船させた。恐怖のため De Leeuwin 号は食料を探しに Pidie の方角へ脱出した。しかし、De Leeuwin 号の帆走速度より撃ちあい事件の話が伝わるのが早かった。Pidie に着いた時に De Leeuwin 号は強奪のための 11 艘の Aceh の船に包囲された。撃ちあいの後、逃げ出すことができ Johor に向けて出帆した。陸上にいる仲間たちは捕虜となった。〈275〉その中にはコルネリス・デ・ハウトマンの兄弟のフレデリック・デ・ハウトマンがいた。

第二次遠征から 1599 年 6 月 19 日に香料を積んで帰港した商船団はオランダ商人から賞賛を与えられた。その影響で Maluku 諸島の香料を一括購入するための小商いのためにオランダ商人たちは競って代理店を設立した。このことによって Maluku の香料の値段が上がった。Maatschappij「会社」と呼ばれたこの小商いの会社は、Maluku で何年も商売をしているポルトガルやスペイン人たちの敵に成るべくもなかった。ポルトガル側は Maluku 諸島への他のヨーロッパ商人の来訪を好んでいなかった。彼は従前のままの香料の独占を望んでいたからである。このようにして 1599 年以来、ポルトガルとオランダ側との間に激しい競争が起きたのであった。この競争は香料の生産者たちに利益となった。極めて高い値段を払わなくてはならないオランダの会社は大きな損害を被ったのであった。

ポルトガル人たちと競争できるように、オランダ側は 1602 年に Vereenigde Oost-Indisch Compagnie (VOC 東インド会社)を設立した。この商社は半官半民であった。その本体はオランダ政府に支援され、武装され、保護され、インドにおいて商売ができるような一つ一つの会社から構成されていた。既にあった小商いの代理店は解散し、短期間に 5~6 百万ギルダーの資本金を集めることができた VOC に合併した。商社 VOC は 17 人の重役にゆだねられた。VOC の船舶以外にインドネシアに航海する許可を持ったオランダ船はなかった。VOC はインドネシアの王や領主たちと商業契約を結んだり、戦争と講和をする権利を与えられていた。VOC は職員の昇進と誅首の全権をもっていた。〈276〉また各人が VOC から借金することができた。

第三節 標的としてのポルトガル人

1602年にSteven van der Hagen率いるオランダの艦隊がマラッカを包囲しようとしたがポルトガルの防御を突破することはできなかった。オランダ側にとってポルトガル人たちは最大の敵であった。マラッカ海峡の交通を制圧しBandar Acehの胡椒の一括購入と共にMalukuの香料交易を支配していたマラッカ港市に約90年間巢食っていたポルトガル人たちはオランダ人の利益のために排除しなくてはならなかった。この目的のために全精力が投入された。



STEVEN van der HAGEN.

1601年に司令官ジェームス・ランカスター(James Lancaster)卿が率いる四隻のイギリス艦隊が、エリザベス女王の親書をサルタン Alanuddin Riayat Syahに進呈するため



James Lancaster 卿

にAcehにむけて出港した。ジェームス・ランカスター卿は1602年5月29日にBandar Acehに到着し、1602年10月まで滞在した。Acehでの滞在中にジェームス・ランカスター卿はAlauddin Riayat Syahとの間に通商条約を締結した。この条約により、Acehのサルタンはイギリス商船がBandar Acehに入港することを許可する旨の確認書を出した。Acehの人たちは投錨するイギリス船の乗組員に敵対することなく、必要な援助を与えなくてはならなかった。

ジェームス・ランカスター卿はAlauddin Riayat Syahから国賓待遇を受けた。サルタンは正装して膝には儀仗用の剣とダイヤモンドとルビーがつけられた二本のクリスを腰に下げた。40人の侍女が右からサルタンを扇ぎ、38人のAcehサルタン国の高官が左に並んだ。ジェームス・ランカスター卿と部下、Witte dan Zwarte Arend号に乗船してきた二人のオランダ人の客はカーペットの上に胡坐をかいて座った。〈277〉儀式が終わった後に食事その後踊りが続いた。

踊りが終わった後でサルタンと外国人客の懇談は続き、サルタン国の高官たちはその席を辞した。この懇談中に、ジェームス・ランカスター卿は Aceh 沿岸からポルトガル人を追い払うことを約束した。彼は重武装した艦隊を引き連れて戻ってくることであった。このようにして Aceh 側とポルトガル側との友好にひびが入った。イギリス側が発言したことを同席した二人のオランダの客は快諾した。

イギリス船が Aceh にいることがポルトガル側に知られてしまったので、女性の提督 Mala Hayati の助言で、四隻のイギリス船は夜陰に乗じて Aceh 港を後にした。翌朝、マラッカに向かう 20 隻のポルトガル船が Aceh に停泊しようとした。上記のイギリス船の安全のためこのポルトガル船は 10 日間にわたり港に停泊させられた。サルタンからの許可が下りない間はこのポルトガル船は胡椒を積み込むことができなかった。この船団の Aceh 港への来航は胡椒の一括購入のためであったことは確かであった。



Cornelis Matelieff de Jonge

マラッカへの二回目の攻撃は 1605 年 5 月にオランダを出港したコルネリス・マテリーフ・デ・ヨンゲ (Cornelis Matelieff) 司令官に率いられたオランダ艦隊によって行われた。攻撃を始める前にマテリーフは Johor のサルタンとまず条約を締結しようとした。この条約にはオランダ植民地政府が A-Famosa 要塞を奪うことができたならマラッカをオランダに割譲することと自由に防衛する許可が書かれていた。これがオランダ側とマレー側の最初の条約であった。この条約から Johor のサルタンは計画していたポルトガル要塞の陥落からは何も得ることができず、衰え始めたポルトガルの植民地軍からまだ新鮮なオランダ植民地軍への交替を意味していたので、かえって損失を吞まざるを得なくなることは明白であった。〈278〉この強制的な条約は拒否された。それ故 Johor のサルタンとマテリーフの間に対立が生まれた。既に開始されていたマラッカの包囲は解除された。さらにゴアからポルトガルの支援艦隊が到着した。このような事態でオランダ軍の二回目の攻撃は再度失敗に終わった。

オランダ側はまだ Johor のサルタンの支援を望んでいた。1606 年 9 月に Johor のサルタンとの条約締結交渉が再度行われた。この条約にはオランダ船の積荷を保管

し、弾薬を保存し、病人を収容し、住居のための一区画の土地を提供することをオランダ側は希望した。その時、オランダ側はすでにポルトガル人を憎み始めていた Aceh のサルタンとも条約を締結した。オランダ側と Aceh 側はポルトガル人たちに対抗するために軍を一体化することに同意していた。このような方法でオランダ側は Jahor のサルタン側からは設備を Aceh のサルタン側からは協力を得たのであった。

1608 年、Pieter Willemsz Verhoeff は Johor に寄港し、1606 年 9 月に署名された条約の実行を Johor のサルタンに促した。この条約には Batu Sawar に要塞を建設することをオランダ側に Johor のサルタンが許可を与えたと明記してあった。Johor のサルタンは、Aceh 軍と対戦するために Johor をオランダが支援してほしいという代案を出した。この申し出が受け入れられた暁には、Batu Sawar の要塞構築を許可することによってであった。Verhoeff はその代案を拒否した。この拒絶によってオランダと Johor の関係は崩壊した。

オランダ植民地政府と Johor のサルタンとの関係断絶はポルトガル側に Johor のサルタンに接近する好機を与えた。Aceh の人たちに対抗するべく Johor とマラッカは一体化した。このような背景で、1610 年 10 月に Johor のサルタンとポルトガル人たちとの間で友好条約が締結された。この条約のゆえに Johor とオランダの関係の歴史は終焉を迎えたのであった。〈279〉

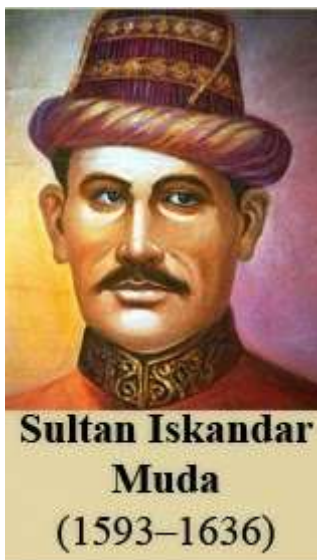
第四節 大アチェ(Aceh Raya)の建国

国家収入の増大と国民の繁栄と平和の構築のためにサルタン Alauddin Riayat Syah は Cermin 海岸と、Daya, Pidie, Pasai の四港を開港した。この四港は交易のために広く開放された。Aceh での商売のために来訪する外国人にも同様に解放した。港や市場はアラブ、中国、ペルシャ、シヤム、トルコ、ペグー¹³、ベンガル、ポルトガル、スペインからの外国商人でにぎわった。イギリスとオランダとの通商関係が構築された後にはイギリスとオランダの商人も見られるようになった。何十年間にもわたりマラッカと Maluku 諸島と Aceh における交易とを支配してきたポルトガル人たちは他のヨーロッパ人たちが来航するを見てうれしくはなかった。イギリスとオランダの商人たちは、

¹³ (訳) ミャンマー

自分たちの利益を損ねる競争相手となった。この姿勢はサルタン Alauddin Riayat Syah の立場に対抗するものとなった。やがてサルタン Alauddin のポルトガル商人たちへの姿勢も変化した。彼はその嫉妬心を憎んだのであった。

Aceh 港での胡椒の交易は大々的に発展したので、サルタン Alauddin は胡椒の栽培を劇的に拡大した。それ故、極めて広大な胡椒農園を開発し、その農園に胡椒を植えるために農民たちは前金を受け取った。この胡椒交易のおかげで、Aceh サルタン国は極めて豊かになった。胡椒の販売益と港での関税収入は Aceh サルタン国の建設に充当された。あらゆる分野での Aceh サルタン国の発展は目を見張るものがあった。胡椒の販売益と港での関税収入で、Aceh は自国の艦隊を増強するために外国製の船舶を購入することが可能になった。武器の支援はトルコ王国から受け取った。しかしながら、この援助以外にサルタン Alauddin はオランダとイギリスから武器弾薬を購入することができたのだった。Aceh はマラッカと対抗できる大航海時代の強国になった。Demak が崩壊した後、Aceh はマラッカのポルトガル人たちを攻撃できるインドネシアにおける唯一のイスラム国になった。〈280〉Aceh はポルトガル側に恐れられた。



サルタン Alauddin Riayat Syah は高齢であったので息子のサルタン Ali Rakyat Syah がサルタンの地位についた。サルタン Ali Rakyat Syah の治世下で 1606 年にマラッカからのポルトガル人たちに攻撃された。Alauddin Riayat Syah の養子でその当時 Mahmud Syah との覇権争いで投獄されていた Perkara Alam はポルトガル人に対抗するために恩赦を受けた。Perkara Alam は若者部隊(barisan muda)の隊長であった。彼が出獄した時、直ちに若者部隊の隊員を動かした。王都から 10km のところに建てられたポルトガルの倉庫は包囲された。この包囲作戦は功を奏した。ポルトガル人たちの武器は接收された。ポルトガル人たちは Aceh 海岸から駆逐されたのであった。

ポルトガル人たちを Aceh 海岸から駆逐して間もなくサルタン Ali Rakyat Syah は死亡した。若者部隊の支援で、Perkasa Alam は Sultan Iskandar Muda Perkasa Alam の名でサルタンに 1607 年に即位した。まだ 18 歳だったサルタン Iskandar Muda は直ち

に Aceh の艦隊と国家の基本方針、経済発展計画を構築した。五年間の間に Iskandar Syah は、Tun Perak 宰相の支援で Alauddin Riayat Syah の時代以降マラッカの支配に屈していたスマトラ東海岸の諸国を奪うことに成功した。1612 年に彼は Aru/Baruman を奪還し始めた。続いて Rokan, Siak Kampar も奪還された。Indragiri と Jambi の王は産物の胡椒を Aceh 商人に売ることを強制された。このように 1612 年以降、スマトラ東海岸は Aceh の支配に戻った。これらの地域の支配は、1610 年に明確に Aceh に敵対しポルトガル側との友好条約を締結した Johor のサルタンの姿勢への報復であった。〈281〉1612 年以降、スマトラ東岸のすべての港湾はポルトガル商人に対して封鎖された。

スマトラ東岸での胡椒市場の喪失を受けたポルトガル人たちは Patani に方向を変えた。Johor, Pahang Kedah, Patani 産出の胡椒はポルトガル商人たちに独占された。Patani はマレー半島東岸における大きな胡椒市場となった。Jambi, Indragiri, Palembang 産出の胡椒は Patani へ流れた。Patani は胡椒市場における Aceh の競争相手になったのであった。Patani が Aceh の利益を損ねるようになった。このような背景で、サルタン Iskandar Muda は突然マレーに軍を派遣した。1613 年に Johor の Batu Sawar 要塞が攻撃された。Johor のサルタン Alauddin と家族は捕らわれて Aceh に送られた。しかし、サルタン Alauddin は後日 Johor のサルタンに復位した。サルタン Alauddin のポルトガル人たちに対する姿勢は変わらなかった。この件はサルタン Perkasa Alam の怒りを増大させた。Aceh の艦隊が Batu Sawar 要塞を撃破するために再度派遣された。Alauddin は Bintan に避難した。王の娘婿である Abdullah 王が Perkasa Alam によって Johor のサルタンに持ち上げられた。Johor が陥落した後、1618 年に Pahang が、その翌年は Kedah が、1620 年には Perak が陥落した。Pahang の胡椒農園は破壊された。Patani は降伏したために攻撃されなかった。胡椒の市場はまた Aceh に戻った。生産された胡椒のすべては Iskandar Muda の完全な支配下であり、Aceh の商人が Aceh に運んで外国商人に Aceh 港で販売された。他の場所で胡椒を購入することを申請したイギリスとオランダの商人たちは、Aceh 港のみで外国商人に販売するという厳しい回答を得たのであった。外国人のみならず現地人でもポルトガル人たちを支援しようとする人は誰でも Aceh の敵として見られたのであった。

Aceh 港は国際港になった。胡椒を買い付けようとする外国商人たちは Aceh 港に来なければならなかった。このこと自体、外国船からの荷卸しと胡椒の積み込みは Aceh 港のみで行われた。Aceh, Aru, Kampar, Indragiri, Jambi, Malaya の胡椒は Aceh 港にあふれかえった。アラブ、ペルシャ、ペグー、トルコ、シヤム、インド、イギリス、フランス、オランダの船は Aceh 港に並んで胡椒の積み込みを待つようになった。外国からのあらゆる商品は Aceh の港で売買された。コーラマンデル¹⁴産の縞模様の生地(kain pelikat)、シリアの絹、日本の陶器、マラバール¹⁵と中国、日本の絹、ヨーロッパの香水、Minangkabau の金銀、Pahang の錫、Maluku の香料、すべてが Aceh 港で購入できた。諸国からの商人の来訪でにぎわう国際港になった Aceh 港の繁栄は国民の繁栄と平和、国家収入の増大をもたらした。巨大な宮殿に建替えられた。金の装飾品は港町かその周辺で製造された。この大きな収入は極めて強力な艦隊を創設する可能性を与えた。サルタン Iskandar Syah の時代の Aceh 港はマラッカ海峡の船舶航行を支配していた。マラッカの港は衰え始めたのであった。

戦闘艦の増設と外国の武器を装備した Aceh の艦隊の創設はマラッカに巢食う主敵を殲滅する計画であった。マレー半島の大部分はすでに Aceh の支配下に入った。彼らはマレー半島の服属地域を巡回した。しかしながら、上記の服属地域ではポルトガル人たちが Aceh に対抗するために領主たちの支援を本当に必要としていたため、領主とポルトガル人たちとの良い関係はそのまま続いていた。服属地域の領主とポルトガル人たちとの関係は、現地の領主に Aceh の支配から自分を解放する一縷の望みを領主たちに与えていた。それが原因で、彼らは Aceh の属国の領主であるにもかかわらずこの関係はずっと維持されてきた。

マラッカ港市からポルトガル人たちを駆逐するために全力が注がれた。このようにサルタン Iskandar Muda は 1627 年に 20,000 名の軍隊を伴ってマラッカに艦隊を派遣した。〈283〉Aceh 軍はマラッカを奪うために一斉に動き出した。しかし、服属地域の Pahang, Johor, Patani 地域の領主たちのおかげで、ポルトガル人たちはアチェ軍に反撃したためその攻撃は失敗に終わった。大々的な Aceh 軍の攻撃は失敗に終わった。それ以降マラッカを攻略しようとはしなかった。航行中のポルトガル船に対する

¹⁴ (訳) Koromandel→Coromandel = インド南東部の海岸地方

¹⁵ (訳) Malabar インド南西部の海岸地方

小さな攻撃は行われたが、マラッカ港のポルトガル人たちの占領に関しては何の変化も与えることができなかった。A-Fomosa 要塞は極めて戦略的で頑丈で陸上のみならず海上からの敵の攻撃が難しいことがここで証明されたのであった。

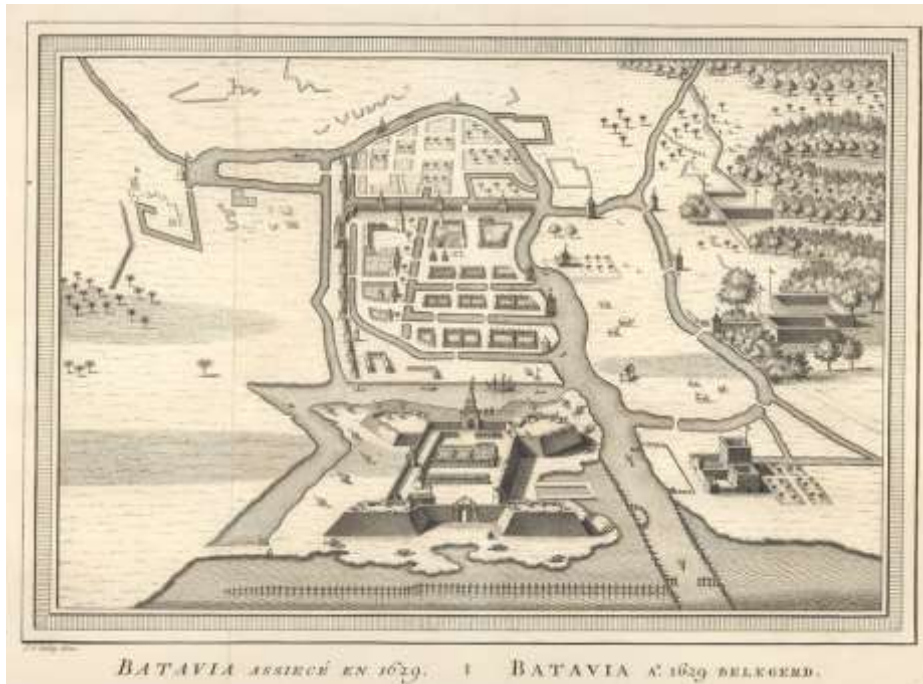
サルタン Iskandar Muda Perkasa は 1636 年に子供を残さずに死去した。サルタン Iskandar は Pahang が Aceh 軍の手中に落ちた時、1618 年に Aceh に連れてこられた Pahang のサルタン Ahmad Syah の息子を養子にした。この Pahang 王の息子は 1636 年に、サルタン Iskandar 二世を意味する Sultan Iskandar Sani (Thani) の名で後継者となった。Iskandar Muda は大アチェ国(Aceh Raya)の建国に成功したがマラッカのポルトガル要塞を陥落させることはできなかった。

第五節 オランダの姿勢



Pieter Willemsz Verhoeff が Johor のサルタンとの条約締結に失敗し、1610 年に Johor のサルタンがポルトガル人たちとの友好条約に調印して以来、オランダはジャワの北岸に着目した。1611 年に将軍 Both 総督は Ciliwung¹⁶ 河口に一筆の土地を Jayakarta の王子から獲得した。この土地は VOC の商売の発展のためには死守すべきものであった。1618 年にこの土地は 24 人の VOC 軍に占領された。ヤン・ピーテルズゾーン・クーン (Jan Pieters Zoon Coen) はこの地に要塞を建設することを意図していた。〈284〉イギリス側と Jayakarta の人たちはオランダがここを占領することに同意しなかった。Jayakarta の人たちの包囲の中でクーンはただちに要塞を建設し始めた。この Jayakarta のオランダ要塞は 1619 年に Batavia と命名された。1619 年 5 月にクーンは 1000 人の軍隊で Jayakarta の守備を破り Jayakarta の町を焼き払った。

¹⁶ (訳) ジャカルタを南北に貫通する川



オランダ側がバタビア要塞を構築し直ちに Batavia と改名した Jayakarta の町の全域を支配した後、オランダ側はいまだにポルトガル人の支配が続いているマラッカと釣り合うための港湾を作ろうとした。バタビア港はオランダの交易の中心地と要塞都市と

なった。バタビアからオランダはその支配を拡大したのだった。彼らは Ciliwung 川の左右岸に倉庫を建設した。

1624 年に Aceh 軍は Indragiri に侵入し Jambi を攻撃する意図を見せた。当初オランダ側は Jambi 王を支援する意図があったが、Aceh と敵対することを恐れてこの意図は放棄された。いずれにせよ、胡椒を獲得するためとポルトガル人の支配からマラッカを共に奪い取るために Aceh との友好を重んじたのであった。ポルトガル人たちはマラッカから駆逐すべき主敵であった。この目的のために、Aceh のサルタンもポルトガル人に敵対していたのでオランダ側は Aceh のサルタンに対してよい姿勢を見せる必要があった。Aceh との友好関係以外にオランダは Johor のサルタンからの支援を得ようとまだ努力していた。Johor のサルタンとの条約締結の機会がある都度、その機会を利用しようとしていた。1636 年に Johor のサルタンは Aceh の支配から抜け出した時、Johor のサルタンは Aceh の攻撃から守ってくれるようオランダに支援を求めた。Johor は Aceh の人たちよりポルトガル人やオランダ人の方との友好を望んでいたのであった。Aceh の人たちにとって Johor のサルタンはマラッカからポルトガル人たちを駆逐するための障害になっていた。〈285〉Aceh のサルタン Iskandar Muda Perkasa Alam が死亡した後、新サルタンの Iskandar Sani が Pahang の混血であるにもかかわらず、Johor は Pahang と Patani を Aceh に敵対するように扇動した。このように、この

オランダの姿勢は Aceh の人たちの信用を得ることができなかった。Aceh のサルタンとの友好は胡椒を獲得するためとマラッカに巢食うポルトガル人に対抗するための Aceh 軍を武装させることを意図していた。

Mataram サルタン国の建国初期以来 Panembahan Senapati は中部ジャワと東部ジャワの各地域を統一するのにかまけて、外国からの脅威に対して注意を向ける暇がなかった。ポルトガル商人たちは香料を一括買いするために東インドネシア諸島を自由に動き回っていた。Panembahan Senapati は 18 年間にわたって統治を行い、1601 年に死去した。Panembahan Senapati の死後、Mataram のサルタンになったのは Panembahan Seda Krapyak であった。彼は 12 年間の統治の後 Krapyak 村で 1613 年に崩御したと言われている。同統治下で彼は Puger という自分の兄弟に率いられた Demak での反乱と Jayagara 王子に率いられた Panagara の反乱を鎮圧することに成功した。Puger のみならず Jayaraga も Panembahan Senapati の息子であった。

Panembahan Seda Krapyak は四人の息子と一人の娘を残した。この四人の息子とは Raden Mas Rangsang, Raden Mas Menang, Raden Mas Martapura, Raden Mas Cakra であった。娘とは Ratu Pandan であった。Panembahan Seda Krapyak の後任は、父親との約束に従って、Raden Mas Martaputa になった。しかし彼は記憶障害を持っていた。それ故、彼は Mataram サルタン国を Raden Mas Rangsang に譲り渡した。Raden Mas Rangsang がサルタンに即位した後、かれは Sultan Agung Senapati ing Alaga Saidin Panatagama で、呼び名は Prabu Pandita Anyakrakusuma と称した。〈286〉Raden Mas Rangsang は Sultan Agung の称号で知られている。Sultan Agung の統治の初期に Mataram サルタン国は大きくなった。Mataram に服属していない東部の諸国は攻撃される一方で反乱者は弾圧された。征服された地域は Blambangan, Pasuruan, Surabaya, Wirasaba, Madura, Tuban, Giri で、一方 Mataram の支配から脱しようとしていた Pati と Pajang は粛清された。中部ジャワと東部ジャワの全権を掌握した後初めて Sultan Agung は外来の敵に注目し始めた。彼は Jayakarta がオランダ軍に占領されたことを聞いた。Jayakarta へのオランダの来訪は Mataram の地位に対する脅威となった。それ故、1628 年に彼は Pangeran Mandureja が率いた Mataram 軍を Jayakarta に派遣した。Sampang と Gresik の太守は Mataram の艦隊を率いた。

Jayakarta への遠征は希望した通りの結果をもたらさなかった。帰路に Mandyreja 司令官は Sultan Agung の命令で暗殺された。

オランダ人たちが建設した Jayakarta 要塞に対する Mataram 軍の攻撃は 1628 年と 1629 年に行われた。双方とも失敗に終わった。これ以来 Sultan Agung は Jayakarta のオランダ要塞を攻撃しようとはしなかった。

第六節 ポルトガル人たちの闘争意欲の衰亡

1511 年にポルトガル人がマラッカに足を踏み入れて以来、彼らは次々とマラッカの Mahmud Syah とその子孫たちと Aceh の人たちから攻撃を受けた。Sultan Mahmud には二人の息子がおり、一人は Johor の Alauddin Riayat Syah 二世で、もう一人は Perak のサルタン Muzaffar Syah であった。この二人とも、失敗して最後には Kampar に避難した父のサルタン Mahmud Syah の闘争を続けていた。〈287〉1533 年にサルタン Alauddin Riayat Syah は Johor Lama からマラッカを攻撃したが反撃されてしまった。Johor の人たちは反撃されて退却したのだった。1587 年に Johor のマラッカ攻撃が繰り返された。今回 Johor の人たちは Naning と Rembau (Negeri Sembilan) に居住するミンカバウ人たちの支援を得た。ポルトガル人は陸と海から攻撃された。しかしながら彼らはポルトガル人をマラッカから駆逐することができなかった。それどころか反対のことが起きた。復讐戦で Johor の町が灰燼に帰したのであった。

Aceh 側は 1537 年と 1547 年に突然マラッカを攻撃した。この二回目の攻撃でマラッカは海から Perlis まで包囲された。この幅広い包囲網は陸上からだけでなく海上からの支援からマラッカを孤立させる意図を持っていた。Aceh の人たちは、ポルトガル人は空腹になってそのうち降伏するだろうという希望を抱いて封鎖作戦を行った。Perak, Johor, Pahang はその当時 Aceh に服従していた。これらの国の全勢力がマラッカ陥落に向けられた。300 隻の船舶と 8,000 人のマレーの兵士が一緒に動いた。Patani からの援護のおかげでポルトガル人たちは Perlis で反撃して敵を退却させることができた。Perlis での敗戦の知らせはマラッカの Aceh 人たちの闘争精神を減退させた。その反対にこの知らせは A-Famosa 要塞に立てこもり、マラッカの海岸に近寄

ろうとする敵を遠距離砲で狙い撃ちするポルトガル人たちの闘志を高めた。最終的には Aceh の防衛線は破られた。包囲作戦は失敗したのであった。

それ以降、Aceh 人の攻撃はなくなりはしなかったものの小規模のものが実行されただけであった。この攻撃は 1551 年と 1574 年、1575 年に行われた。最終の最大の攻撃は 1627 年の Iskandar Muda によるものであった。マラッカの町は包囲されたが、包囲網はまたも失敗した。ポルトガル人と Aceh 人の戦いは二年間にも及んだ。〈288〉この攻撃はポルトガル人たちの闘志を劣化させる原因にはならなかった。ポルトガル人たちの闘志を弱めた衝撃とは Aceh 人でも Johor からでもなく、スペイン人からのものであった。1580 年にリスボン港がスペイン人に支配されてからはポルトガル人の商魂も闘志も下がった。1580 年以降ポルトガル人は防衛的な態度をとるようになった。リスボン港のスペイン支配は仕事に対する情熱、商魂、闘志を殺してしまう衝撃として感じられた。仕事に対する情熱、商魂、闘志の減少は内部からの崩壊であった。たとえば動脈はきちんと働いているのに心臓を刺されたようなものであった。

ポルトガルがスペインに支配されてからは、ポルトガルはスペインの意向に従わざるを得なくなった。国家財政の元であり国民の繁栄と平和の元であったリスボン港は完全にスペインの支配下に入ってしまった。このようにポルトガルの国家財政の元であり国民の繁栄と平和の源はふさがれてスペイン人の手に落ちた。国家収入と国民の繁栄は下がる一方国内からの徴税額は不十分であった、スペイン商人たちも東方の諸国へ一緒に航海するようになった。ポルトガル人は東方諸国での香料や胡椒の独占商売を支配できなくなったのである。

多数のポルトガル商人はやる気をなくした。商魂が衰えた。東方諸国からの香料や胡椒、錫を積んだ船のリスボン港への入港も減少した。ポルトガルの領主たちの間での利潤さがし的情熱はもはや制御されなくなってしまった。簡単に儲かったものは簡単に漏れるのである。おそらく国庫に入ってポルトガルに送られるこの利潤は領主たち個人の利益になってしまう一方、東方諸国の艦隊と軍隊の費用は、国内での徴税額が不十分で海外から収入が入ってこないため、ポルトガル政府にとって非常に重いものになった。〈289〉



Francisco de Xavier

ポルトガルは小さな国で国土面積は80,000km²で16世紀の人口は約50万人であった。ポルトガル艦隊はインド洋と太平洋を支配し一世紀上にもわたり香料交易を独占してきたにもかかわらず、アジア大陸沿岸部の東方諸国を支配する夢は持っていなかった。ポルトガルは征服国を支配する十分な人口を有していなかったのであった。ポルトガル人にとって重要なことはすぐに高い利潤を得られる独占交易であった。商品を輸送する商船の安全のために彼らは一つの場所から別な場所に素早く動くことのできる強力な艦隊を創設した。彼らは商品を保管する倉庫群を海岸に建設し、攻撃された時の防御のために要塞を構築した。Malabar 海岸のゴアやハレー半島西岸のマラッカは強力な防衛都市となった。これらの場所では死に物狂いの防衛が必要とされたのであった。ゴアとマラッカは利益の源で軍事力の拠点となった。マラッカ港市はすでに長いことポルトガル人側とAceh, Johor, Demak 側の奪い合いになっていた。その後オランダ人たちもその奪いあいを受け継いだ。ポルトガルでの人員の不足からポルトガルからの支援は来なかったのであった。

ゴアとマラッカのポルトガルの総督の任期は極めて短かった。1515年から1550年までの間に10回もの総督の交代が続いた。この極めて短期の任期は早く私腹を肥やそうとする支配者たちを後押しし、既存の計画を変更し実行する十分な時間は与えられなかった。さらに、新しい計画を実行に食い込ませる機会がないままに退任の時期がやってきたのであった。後任者は何も知らなかったのであった。〈290〉二年間だけという総督の任期は業務に多大な損害を与えた。

商魂以外に、ポルトガル人たちはその当初、篤い信仰心を持っていた。彼らはキリスト教を広めるという夢を膨らませて東方諸国に航海したのであった。キリスト教の牧師や神父が列島諸島¹⁷にキリスト教の牧師や神父がやってきた中にフランシスコ・デ・ザビエル¹⁸がいた。しかしながらこの宗教心はやがて色あせ、商魂と物質的な豊かさを求める方向に変化した。かれらは金儲け競争をするようになった。宗教的モラルは

¹⁷ (訳) インドネシアの島々

¹⁸ (訳) 原著では Fransiscus Xaverius という綴りだが、スペイン語では Francisco de Xavier

地に落ち、儲け探しがそれを払拭してしまった。宗教的情熱と商魂との融合が東方諸国への航海におけるポルトガル人たちの成功を後押ししたのであった。しかし、宗教的情熱の火が消え、商魂が独り歩きするようになると残虐行為が多数行われた。個人の利益が崇め奉られるべき宗教の教えをおしこめてしまった。このようなことで、部下に対する権威を失った領主が多かった。その影響で上下関係が疎になり、たがいにに対する尊敬の念もますます薄くなった。上官の命令に服そうとしないために、軍の規律を退ける軍人も多かった。彼らは海賊として遊弋したのであった。

1619 年以來、ジャワ北岸にできた Batavia 要塞は商業のみならず軍事面でもマラッカにとって強敵となった。ポルトガル人たちの競争相手はマレー人やインドネシア人たちではなくオランダ人たちになった。彼らは同じくヨーロッパ出身であり、その当時の最新鋭の兵器を持参していた。インドネシアの胡椒と香料の独占交易はポルトガル人のものだけではなくなった。他のヨーロッパ人がインドネシア海域に出没し始めた。その最初はオランダ人で強力な競争相手となった。フランスとイギリス商人たちもインドネシアに現れたのだった。

ポルトガル人たちに対する同情は、原住民たちのみならず外国人たちの間でも急速に冷めて行った。ポルトガル人たちはインドネシア海域に現れた他のヨーロッパ人を敵とみなした。そのことから、彼らは互いに敵対視するようになった。彼らは互いに撃破しようとした。Aceh 人たちとマレー半島の Melayu 人たちはもうポルトガル人に信用を置こうとはしなくなった。Iskandar Muda Perkasa に率いられた Aceh サルタン国はマラッカの大敵になった。絶え間なくマラッカは海からの Aceh 軍の攻撃に遭った。追い返されたりはしたものの攻撃は突然行われ、ポルトガル人たちを警戒態勢に追いやったのであった。ポルトガル人たちは最初の頃のように自由に航海することができなくなった。航行中のポルトガル船はオランダ艦隊のみならず Aceh 艦隊に突如襲われるのが常であった。マラッカは常に海から包囲されていた。ポルトガル人は多すぎる敵を持ってしまったのであった。

1639 年にオランダ側は Johor のサルタンと友好条約を締結した。八月にはオランダはマラッカ攻略の準備が整った。しかし、スリランカでポルトガル人たちとオランダ人たちのとの間で銃撃戦が始まったというニュースが届いた。スリランカの領土保全のためにオランダ側はマラッカ攻略計画をひっこめ、軍隊の一部をスリランカに派遣

した。総督 Van Diemen 将軍は 1640 年 5 月 15 日にマラッカ攻撃を決定した。これ以外にもオランダ側は計画済の攻撃に Aceh のサルタン Iskandar Sani を誘った。この誘いは一旦断られたが Johor のサルタンのとりなしで最終的には受け入れられた。陸上部分を占領するために 900 名の兵士がマラッカ港の北側に上陸した。海からはオランダと Aceh の艦隊にマラッカは包囲された。ポルトガル人たちは A-Famosa 要塞に立てこもり正面から銃撃を浴びせた。ポルトガル人たちは遠距離砲で発射しながら要塞で防戦した。1641 年 1 月初旬に多数のオランダ軍将校がポルトガルの砲弾にあたって戦死した。Caertekoe 大尉が司令官に上げられた。1 月 14 日から二日間大規模攻撃が行われた。ポルトガルの防衛線は攻撃で破壊され始めた。最終的に 1 月 16 日にポルトガル総督は降伏した。二日後に彼は死んだ。その遺体はオランダ人たちによって軍隊式で土葬にされた。この事件からこのポルトガル総督はオランダの共同謀議者ではなかったかという疑いが浮かんでくるのである。

A-Famosa 要塞が陥落した後、ポルトガル人たちはマラッカで自由人として生きるかゴアに戻るかの二者択一を迫られた。覇権はポルトガル人の手からオランダ人の手に移った。1511 年末に構築され 130 年間耐えたマラッカのポルトガル要塞 A-Famosa は 1641 年 1 月 16 日に陥落したのであった。

オランダの仲裁でオランダ側に有利な Aceh と Johor の間の抗争に終止符が打たれた。Aceh はマレー半島から撤退した。Aceh に服するのは Perak を残すのみになった。オランダ側は交易を統制し始めた。1614 年の 6 月にオランダは錫の輸出に関する通商条約を Kedah と締結した。Kedah 地域で産出される錫の半分はオランダ側に売らなくてはならなくなったのである。同様な条約が 1645 年に Ujung Salang と Bangeri とオランダの間で締結された。マレー半島の錫の交易はオランダの手中に落ちた。Maluku 諸島の香料交易はオランダ商人たちに支配された。〈293〉マレー半島とインドネシアでのオランダの支配は徐々に商業から支配へと広がった。インドネシアのイスラム国は内部の覇権争いの影響で細かく分裂してしまっていた。このイスラム国の大部分は内部から崩壊していたのであった。外圧でこのイスラム国は無秩序に分離し、きわめて統制のとれたオランダの動きに対抗することができなかった。Jayakarta 王子から最初にオランダが得た資本は Jayakarta 港の土地であった。この一区画の土地の支配が徐々にインドネシア全土にわたる植民地支配の芽を育てたのであった。

オランダから持ち込まれた資本とは、第一に強い愛国心であった。この強い愛国心は内部から崩壊を始めていたイスラム諸国のインドネシア民族の愛国心と対抗した。オランダ人を動かしたその強さは既に分裂していたイスラム国を滅ぼすことに成功したのであった。彼らが持ち込んだ装備は組織運営のうまさと戦略の知識、それに当時としては現代的な武器であった。マラッカの町の崩壊はオランダ人に植民地支配を発展させる機会を与えたのであった。

訳出終了 2015/9/29

校正 2015/10/06